

Q. 脳卒中や心筋梗塞の予防法を活性酸素の観点から説明してください。

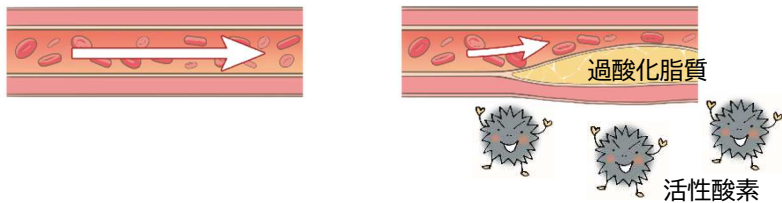
A. 一般の健診では、コレステロールや中性脂肪の値が問題となり、これらの値の上昇を防ぐために脂ものを控えるようにお医者さんから指示されることが多いようです。

これら脂質が直接脳卒中や心筋梗塞を起こすことはなく、実際には脂質が増えても活性酸素が同時に増えなければ、過酸化脂質は形成されないのです。そして、この過酸化脂質こそが脳卒中や心筋梗塞などの病気を引き起こす真犯人なのです。

コレステロールなどの脂質が血液中に大量に存在しても、血液の流れには悪影響を与えませんが、血液中に活性酸素が増加すると、脂質に反応して過酸化脂質が形成されます。

この過酸化脂質は血管の壁に付着して、壁の中に浸透していきます。この結果、血管がもろくなり破れてしまうのが脳出血であり、血管がせまくなってつまりだし、やがて血流がストップするのが脳血栓であり、両者をまとめて脳卒中といいます。心臓の血管で起こるのが心筋梗塞です。

脳卒中や心筋梗塞の予防には活性酸素対策が最も重要であることが分かります。



Q. 丹羽先生は、活性酸素研究の世界的権威であると同時に、臨床医であると聞きましたが、活性酸素を知りつくした生化学のキャリアは丹羽先生の治療現場にどのように生かされていますか？

A. “活性酸素の恐怖”を知る医師として、患者さんの体内で過剰な活性酸素を発生させる元となる化学薬品の使用や不必要な X 線検査を極力避けています。また、従来の抗癌剤、化学療法、放射線療法が新たな癌を生み出す現実を踏まえ、癌患者に対しても極力、抗癌剤(放射線)療法を含む化学薬品の使用を避け、自然の生薬を工夫して投与し、多数の治療実績を上げています。

積極的に活性酸素の害を取り除く対策として、SOD 様作用食品と呼ばれる低分子抗酸化剤を自ら開発して、これを患者さんに使ってもらい、数多くの疾病の治療に役立てています。

活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った“自然の摂理”は、私に大自然のメカニズムの精緻さと人間の自己治療力の偉大さを教えてくれました。

「病気は自分が治すもの」—私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています。



編集後記

この書籍は 1994 年に発行されていますが、内容は、現代こそ必要とされるものと、改めて感じています。少子超高齢化社会の中で、自分の健康を守るセルフケアが必要とされています。この書籍を読み返し、丹羽免疫療法とその賜物である SOD 様作用食品、そして丹羽博士への感謝の思いを新たにいたしました。



前田美恵子

35 年に亘り、免疫療法の権威丹羽耕三博士に師事して得た知識をもとに、全国で開催される健康セミナーの講師を務める。

「AOVA SOD をもっと知りたい。」「AOVA の他の製品も知りたい。」「他の方の経験を聞いてみたい。」という方、お気軽にご相談ください。

丹羽博士が他界されて、博士が長年の研究により積み上げてきた膨大な情報・データという財産が失われてしまうかと心を痛めておりましたが、幸いたくさんの著書を残してくださったことに気づき、改めて読み返しをしています。

著書のエッセンスを皆様と共有することで、多くの方が健康長寿のお役に立てていただければ幸いです。

今回は、前号に引き続き、活性酸素とこれを取り除く SOD 酵素について、人間も自然のしくみの中で生かされている一つの存在にすぎないことに気づかせてくれる 1 冊「**激増活性酸素が死を招く**」から抜粋してお届けします。



書籍

丹羽耕三博士の

から学ぶ

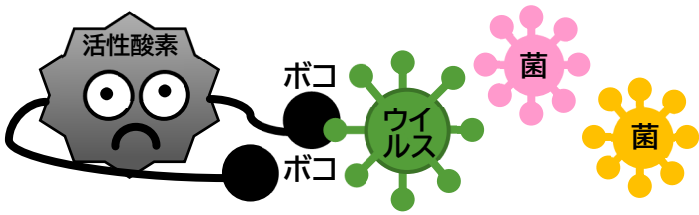
これだけは知っておきたい Q&A

24P

Q. 活性酸素はそもそも何が原因で生まれるのですか？
また、活性酸素の本来の役割は何ですか？

A. 自然界に生まれるものは全てかけがえのない貴い生命です。もともと存在する値打ちのないものなどどこにもありません。悪役と思われがちな活性酸素もその例外ではありません。

人体の中の食細胞で発生する活性酸素の本来の役割は“殺菌”です。つまり、食細胞が体外から入り込んだ細菌・カビ・ウィルスと反応して、これらを破壊、殺菌するのを手伝うのです。もし、活性酸素を作ることのできない病気にかかるとすると、私たちの体はたちまち細菌やウィルスに占領されてしまうことでしょう。



Q. 活性酸素が原因で起こる病気は、全体の 90 パーセントと聞きましたが本当ですか？

A. 本当です。心臓なら心臓、脳なら脳という個別の臓器の疾患として考えられてきた様々な病気の発病に、活性酸素という共通の悪者がたいていの場合、少なからぬ役割を果たしていることが判明したのです。

今日では活性酸素が関係していないと思われる病気の方が少なくなりました。



丹羽耕三博士プロフィール

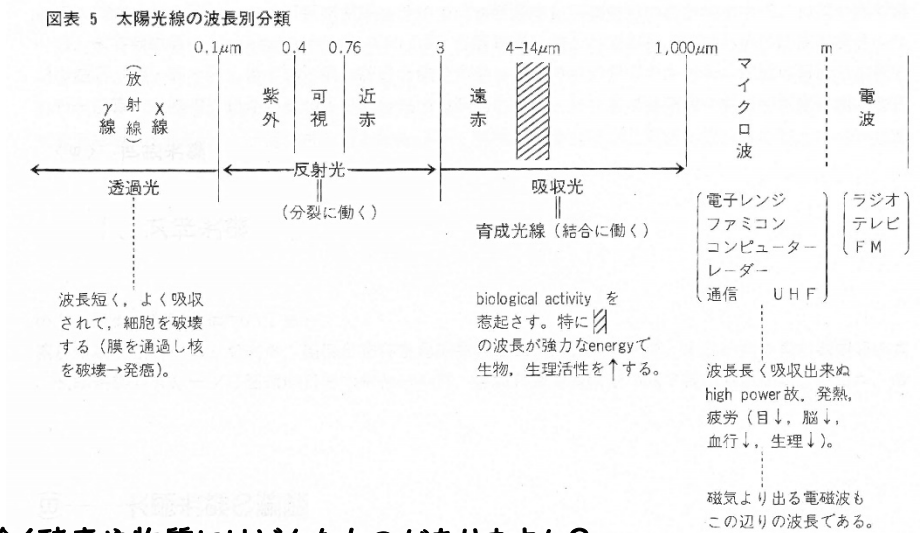


昭和 7 年大阪生まれ
昭和 37 年京都大学医学部卒業
京都大学医学博士
土佐丹羽クリニック院長
丹羽免疫研究所所長
令和 4 年没(享年 89 歳)

活性酸素と SOD 研究の世界的権威。
国際医学雑誌に発表された英文研究論文は 70 編を超す。
西洋医学の限界を知り、自然の植物・穀物から独自の生薬を開発し、全国の診療所でがんや膠原病、リウマチ、アトピーなどに大きな治療効果を上げてきた。
多くの臨床例に裏付けられたユニークな講演には定評があり、学会の座長および招待講演活動が多い。
また、複数の著名な国際医学雑誌への投稿論文の審査員を 30 年以上務めた。

Q. 活性酸素が過剰に発生する原因は何ですか？

A. 突きつめて考えると、その究極の原因は「科学文明にどっぷり浸かった現代人の生活」にあると言えます。過剰な活性酸素が発生する主な原因として、紫外線や放射線、それに化学物質があげられるのですが、これらは現代社会が発展するにつれてますます増加しているものばかりだからです。紫外線はオゾン層破壊にともなって、地球に到達する量が異常に増えています。放射線は、原発事故は言うに及ばず、健康診断のために気軽に受けるレントゲン検査でも被爆が広がっています。化学物質は農薬、殺虫剤、医薬品から塩素化合物、窒素化合物にいたるまで、現代社会にあふれかえっています。



Q. 活性酸素を取り除く酵素や物質にはどんなものがありますか？

A. 活性酸素を生体で取り除く酵素や物質、すなわち抗酸化剤を二つのグループに分けると、分子量が三万以上のものと分子量が 200 から 400 くらいのものに大別できます。前者は高分子抗酸化剤と呼ばれ、SOD 酵素がその代表格ですが、経口の場合、人間の胃液で破壊分解されてしまいますし、そもそもこれだけ分子量が大きいと腸管からの吸収はほとんど期待できません。後者は低分子抗酸化剤と呼ばれ、ビタミン C や E、B₂を始め、カロチン、カテキン、フラボノイドなど多数あります。これらは腸管から吸収可能で、体内の血液中に運ばれていきます。しかし、現実には人体の中で効果を発揮するためには、二つのハードルを乗り越えなくてはなりません。一つめは、細胞のレセプター（受容体）の“選り好み”の問題です。人体の細胞のレセプターは合成の抗酸化剤が嫌いで、天然のものしか受け取ろうとしないのです。二つめは、天然の低分子抗酸化剤がお互いに手をつなぎあってしまっている問題です。この固い結び目を解かないと、実際の効果は現れないのです。私が長い年月をかけて研究・開発した SOD 様食品（低分子抗酸化剤）は、これら二つのハードルを見事にクリアーすることに成功しました。

Q. レントゲン検査を受けるたびに寿命が縮まると聞きましたが、本当ですか？

A. 残念ながら、本当です。実はレントゲンが人体にもたらす悪影響については科学的根拠があります。ある試算によると、寿命短縮は「胸部 X 線検査を一回受けると一日半、胃透視では一年半」とのことです。レントゲン検査とは、被爆体験するようなものです。放射線が大量に、かつ直接に人体に照射されると、細胞の核の DNA に強力な活性酸素が生じ、核の DNA が破壊されて、人間は即死します。レントゲン撮影の場合のように、微量の放射線が照射されると、DNA を破壊するようなことはありませんが、やがて DNA が傷つけられ、奇形の発生や発癌につながるのです。

Q. 活性酸素が原因となる病気を具体的に挙げてください。

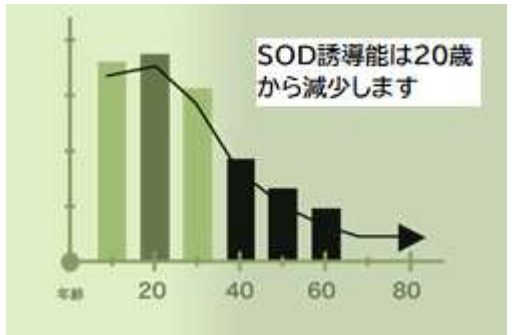
A. 過剰な活性酸素が直接、あるいは間接的な原因となって発生する疾患は枚挙にいとまがありませんが、皆さんが身近に感じている病名を挙げてみます。脳卒中（脳出血、脳血栓、脳梗塞）、心筋梗塞、癌、白血病、白内障、糖尿病、肝炎、腎炎、膠原病、肺硬化症、皮膚潰瘍、胃潰瘍、腸管潰瘍、関節リウマチ、アトピー性皮膚炎など。また、特殊な疾患としてパーキンソン氏病、男性不妊症、ベーチェット病、川崎病などがあります。この他に、近年増加している奇病・難病の多くも活性酸素関連疾患と考えられます。美容の面で問題となるシミ、ソバカス、シワも活性酸素が原因です。

Q. 加工食品や化学物質の害が、活性酸素と関係があるのでしょうか？

A. 大いにあります。加工食品には不飽和脂肪酸が多く含まれており、これが紫外線（活性酸素）に当たると過酸化脂質が形成され、生活習慣病をはじめとする万病のもとになります。除草剤、合成洗剤、抗癌剤に代表される医薬品から窒素酸化物（NOx）に至るまで、活性酸素関連の疾患に関わりを持つ化学物質があふれかえっているのが現状です。

Q. SOD 値が高いと成人病にかかりにくいのですか？

A. それは違います。老若男女、健康人と病人のいずれをとっても SOD 値そのものは、そんなに差がありません。問題になるのは SOD 誘導能といって、活性酸素が体内で増加した時に、それに応じて SOD 値を上昇させる能力です。SOD 誘導能は個人差もありますが、一般に四十歳を過ぎると低くなる傾向にあります。活性酸素や過酸化脂質と関係した病気にかかっている人を調べると、総じて SOD 誘導能が低いことが判明しています。したがって SOD 値ではなく SOD 誘導能が高い人が、活性酸素や過酸化脂質が原因となる成人病にかかりにくいといえます。



Q. たばこを吸い過ぎると SOD の力が弱くなるのですか？

A. たばこは「百害あって一利なし」の無用の長物であり、健康のためにはもちろんよくありませんが、喫煙によって SOD の力、すなわち SOD 誘導能が低くなることはありません。たばこは確かに肺で大量の活性酸素を発生させますが、たばこの吸い過ぎによって SOD 誘導能が低下して肺癌にかかるのではなく、SOD 誘導能の低い人がたばこを吸い過ぎた場合に、喫煙にともなう活性酸素の増加を SOD が排除できずに肺癌にかかりやすいのです。たばこの害は、「SOD の力を弱くすること」ではなく「活性酸素を増加させること」です。

